

金沢八景-東京湾 アマモ場再生会議 設立趣意書

東京湾はかつて、多くの干潟と浅場に恵まれて、いたるところにアマモが茂り、「アマモ場」は多くの小魚達の生活と繁殖の場でした。われわれの生活が便利になるのに並行して、残念ながら、この海の豊かさは次第に少なくなってきました。

それでもまだ、金沢八景沿岸部の野島、平潟湾、金沢湾は、市民が安心して水と触れ合い「海を感じる」ことができる、横浜でも数少ない場所です。また、春の「潮干狩り」、秋の「はぜ釣り」といったかつての江戸前の海の雰囲気と、東京湾の四季の風物をいまだに体験できる場所として残っています。

金沢八景の海など、海岸と海とを愛する私達は、これまでいろいろな機会をとらえて貴重な海の自然を大切に育ててきました。私達は、これまで、市民団体、企業、大学、研究機関などの働きをとおして、金沢八景の海を対象として、その恵みを享受し続けることができるように努めてきました。その中で、私達にとってふるさとの海とも言える、野島・平潟湾・金沢湾を再生し、その豊かさを取り戻すために、ゆるやかな協働による具体的な活動が必要であると自覚するようになりました。

それは、海のゆりかごといわれるアマモ場を金沢八景の海に再生することです。アマモは、魚が生まれ育っていくうえで大切な海草（うみくさ）です。かつては、東京湾には多くのアマモ場があり、小さな魚達のゆりかごになっていたのです。しかし今では、金沢八景周辺の浅場（あさば）にアマモ場はほとんどありません。私達は、市民、企業、大学・研究機関、行政の協働によって金沢八景の海にアマモ場を再生しようという活動を起こすことにしました。金沢湾にアマモを移植し、守り育てて行こうという試みです。私達の金沢の海を、また私達の東京湾を、アマモ場の再生をとおして復活し、東京湾に生き物たちの賑わいをとりもどしたいと考えています。

金沢八景発-東京湾再生に向けて、アマモ・リバイバル！その決意のもとに私達は、ここに「金沢八景 東京湾 アマモ場再生会議」を設立します。

2003（平成15年）年6月30日

金沢八景 - 東京湾 アマモ場再生会議
（代表 林しん治）

注記：アマモとアマモ場

アマモ 単子葉植物、オモダカ亜綱イバラモ目アマモ科に属する多年生海草の一種（学名：Zostera marina L.）。別名、モシオグサ、リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結の切り外し）。

アマモの仲間には、海中の砂泥域に生育するアマモ、コアマモや岩礁域に生育するエビアマモなどがある。アマモ場を形成するのは主にアマモである。春先には草体の一部が花枝に変化し種子を形成する。海底に落ちた種子は冬に発芽し、冬から春にかけて盛んに生長する。この時期に地下茎が増殖して株分かれをくり返す。春から夏にかけて繁茂・成熟し、枯死して海底に沈積するか、流失する。秋になると草丈の短い草体のみとなる。繁殖方法は種子によるものと、地下茎が増殖して新しい株を形成する栄養株によるものとの二通りがあるが、夏季の高水温など何らかの制限要因がある場合は栄養株はみられず、一年で寿命を終える。

海岸には単子葉植物の海草や藻類の海藻が集まって生育している「藻場（もば）」があるがアマモ以外の海草は基礎研究が相対的に遅れていて、生活史・生長様式・生育環境に関する情報が不足している。したがって、アマモ以外の海草を用いて、われわれの会の活動方針にある育成・移植を核とした環境教育プログラムを開発することは、当面困難のようである。

ここでいうアマモ場とは、アマモ類によって構成される海草群落の総称である。東京湾ではアマモ、コアマモ、タチアマモの3種により構成されている。アマモ類は日中光合成によって栄養塩類と二酸化炭素を吸収固定し、溶存酸素を放出することで水質・底質を浄化している。アマモ場が形成する複雑な海中・底泥空間は、多種多様な沿岸生物の産卵・保育・成育場として機能している。アマモ場は、昭和30年代までは金沢湾は勿論のこと、東京湾奥部にまで広く分布していた。アマモ場の周囲は現在でもアサリ・ハマグリ・バカガイ、コウイカ等の漁場となっている。アマモ場が形成される場所は静穏な砂泥域で、多種多様な生物が棲息していることから、かつては子供たちの格好の遊び場ともなっていた。また、かつては枯れた葉を肥料として有効利用したことが日本の各地で記録に残されている。アマモ類は水・底質の変化に応じて株密度や分布範囲が変わることから、欧米ではアマモ場が沿岸域環境の総合指標や回復目標として認知され、監視活動が行なわれている。

このように、アマモ場の存在は単に海草の群落と云うだけでなく、アマモ場が成立つような社会文化も含めた多様な機能と価値とを持った基盤を提供しているといえる。